

「モネの池」襲う外来水草

かつて外来魚に悩まされた東京都立井の頭公園（武蔵野市、三鷹市）の「井の頭池」が、新たな危機に直面している。池の水を抜いて生態系を改善させる「かいぼり」で外来魚は駆除したものの、今度は外来の水草が繁殖しているのだという。最後の「かいぼり」から4年。地元のNPO法人は再度の実施を求めるが、5000万円に上る費用面の課題もあり、都は慎重姿勢を崩していない。

かつて外来魚に悩まされた東京都立井の頭公園（武蔵野市、三鷹市）の「井の頭池」が、新たな危機に直面している。池の水を抜いて生態系を改善させる「かいぼり」で外来魚は駆除したものの、今度は外来の水草が繁殖しているのだという。最後の「かいぼり」から4年。地元のNPO法人は再度の実施を求めるが、5000万円に上る費用面の課題もあり、都は慎重姿勢を崩していない。

桜が見頃を迎えた3月下旬。JR吉祥寺駅近くにある井の頭池をのぞき込むと、濃緑色の水草が生い茂っているのが見えた。「外来種の『コカナダモ』なんです」と話すのは、池の保護活動に取り組む地元NPO法人「生態工房」の佐藤方博事務局長（48）だ。

2年ほど前から目立ち始めて、今は約4・2haの池全体に広がっているという。コカナダモは北米原産で、1961年に国内で初めて滋賀県の琵琶湖で野生繁殖と駆除のいたちがこ

駆除へ「かいぼり」望む声

【かいぼり】池の水を抜いて一定期間干し、清掃などを行う作業。元々は農業用ため池の点検や保全目的だったが、水質の浄化効果が注目され、皇居外苑のほか、各地の城の堀や公園の池で行われるようになった。



コカナダモが繁殖する井の頭池。地元NPOの佐藤事務局長は「生態系が崩れかねない」と危惧する（3月下旬、東京都立井の頭公園で）

化しているのが確認された。生育が早く、琵琶湖では繁殖と駆除のいたちがこ

が続いている。大量繁殖した2014年には漁船が操業を見合わせ、レガッタ大会が延期される事態も。県は毎年約3億円をかけてコカナダモなどの水草5000～6000トンを駆除しており、担当者は「放置すると夏場は水草が腐って悪臭を放ち、暮らしにも影響が出かねない」と語る。

栃木県の観光名所・奥日光の湯ノ湖でも25年ほど前から繁殖が問題となり、県などが水質悪化を防ぐための駆除に乗り出している。

*名画の風景消える？

コカナダモが繁殖するまでの井の頭池では、かいぼりによって本来の生態系が順調に回復しつつあった。かいぼりが初めて実施されたのは14年1月。神田川の源流にあり、古くは江戸の街に水を供給していた池の水質は急速に悪化していた。水は緑褐色で、放流されたとみられる外来魚のブルーギルやブラックバスなどが数多く生息していた。都は18年3月までにさら

に2回、ボランティアの手も借りてかいぼりを実施。ゴミを除去し、外来魚を駆除した。その効果で在来種のスジエビやギンブナが増え、カモの越冬も目にするようになった。

16年には、池で絶滅したと考えられていた水草「イノカシラフラスコモ」が約60年ぶりに見つかった。19年になると、絶滅危惧種の水草「ツツイトモ」が群生するようになり、クロロード・モネの名画「睡蓮」のような光景が親しまれてきたが、消滅する恐れもあるという。

*1回5000万円

同NPOでは、コカナダモが在来種の生育を阻害しかねないとして、20年から駆除活動を始めた。最初は池に入って根から抜き取っていたが、新型コロナウイルス禍で活動が制限され、今はちぎれて水面に漂う草を回収するのが精いっぱいだという。昨年11

12月には都が約14トンを刈り取ったが「焼け石に水」の状態で、残った根からの再繁殖も懸念される。駆除にはかいぼりが効果的とされ、国立環境研究所の矢部徹主任研究員は「増殖を防ぐには、定期的な実施が必要になる」と指摘する。

同NPOの佐藤事務局長は「今の除去ペースでは繁殖のスピードに追いつかない」とし、再度の「かいぼり」実施の必要性を訴える。一方、都は1回に約5000万円を要するという費用面などを課題として挙げており、「専門家の意見を聞いて対策を考えたい」とする。